

<牧会ミニ通信>No.20 2020. 9. 13

「あなたがたのことを思い出すごとに、いつもわたしの神に感謝をささげ、あなたがたのために祈る時、どのような時にも、喜びにあふれて祈りました」(ピリピ1:3)。これは使徒パウロの言葉です。牧会者としてのわたしも、またその思いに導かれます。

「K.K.」兄の母親の家庭はホーリネス信者でした。朝ごとに聞こえてくる讚美を耳にしていたのは、奇しくもお隣の住人、K.K.さんの父親「K.M.」さんです。市役所に勤めながらも、趣味人で油絵、人相・手相に凝っていました。その影響を受けたのが息子の K.K.さん一、彼は手相・人相から判断して、人には好かれない相であると信じ込んでいました。彼が美大生の時、教会に導かれキリストと出会いました。

その後、父親の K.M.さんが教会に導かれ、キリストを告白して救われました。お宅に招かれた時のことです、応接間兼アトリエの壁一面に絵が並んで掛けられていました。絵を見ている内、描かれた絵に歴然とした違いのあることに気づきました。それを不躰にお尋ねしたところ、K 画伯は驚きながらも、うなずいていました。

「色に出にけりわが想い」とはいいますが、キリストに出会う「以前」と「以後」とでは、色使いがまるで違うのです。重くよどんでいる絵と明るく軽やかな筆使いの絵とは、直ぐに識別できました。それほど鮮やかな違いがありました。内面が明るくなれば、それが筆遣いや色彩にあらわれるものです。

天地を創造された時、神は漆黒の闇に向かって「光あれ！」と宣言なさいました。

「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光を持つであろう」(ヨハネ8:12)。

「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(ヨハネ1:3-4)。自分の熱心と努力と工夫で「内なる闇」を追い出すことができるはずありません。「闇」から「光」に向かわしめた瞬間、そのモーメントは計り知れぬ神の恩寵でありました。

関東のぞみキリスト教会：牧師 結城 晋次

